

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —



2017年9月22日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信52号



玉原高原のブナ

- 5月後半～9月前半の活動報告(事務局) 1
- 2017 定例活動② 2
「藤原の山菜を楽しむ」
◆開催報告(草野 洋)
- 2017 定例活動③ 3
「ミズナラの若返りと木馬道」
◆開催報告(草野洋)
- 2017 定例活動④ 5
「防火帯刈り払いと野鳥観察」
◆開催報告(草野洋)
◇参加者レポート(城之内みちこ)
- 2017 定例活動⑤ 7
「玉原高原ブナ平&藤原諏訪神社例大祭」
◆開催報告(米山正寛)
- 藤原現地報告(北山郁人) 8
- 藤原の“ほっと”ショットコーナー(中村智子) 9
- 協賛団体紹介 第五回「水上高原リゾート」(稲貴夫) 10
- 野守のつぶやき(清水英毅) 11

編集後記 (敬称略)

【5月 (前号からつづく)】

- 21日 茨城県自然博物館による小貝川でのタチスミレ観察会に清水顧問、西村幹事、他2名参加。
- 27、28日 定例プログラム「新緑の下藤原の山菜を楽しむ」実施。会員9、会友3合計12名参加。ほかに、看板設置、県道の側溝掃除(有志9名)を実施。車座講座は地元ご婦人たちの「とちのみグループ」による「俳句作り」。
- 28日 西村幹事、山崎先生により昆虫調査実施。

【6月】

- 14日 みなかみ町がユネスコエコパークに認定される。
- 16日～18日 NPO奥利根水源ネットワークにて、新方式の炭焼き窯(100L)の試験運転を実施。
- 24、25日定例プログラム 「ミズナラ林の若返り伐採&木馬道再生・延長」実施。18名参加(うち会員13、新規会員1、会友4)。25日は、折から武尊山の山開き儀式が行われており、一同参加。
- 24日 西村幹事、山崎先生ほか1名にて生物調査実施。
- 24日 来春、上ノ原での活動開始より15周年を迎えるにあたっての記念事業についての検討会実施。結論は見送り。

【7月】

- 22、23日 定例プログラム「上ノ原の賑わい観察(野鳥)・防火帯刈り払い」実施。参加16名(会員11、会友5)。車座講座は日本野鳥の会 上原常務理事による野鳥観察にまつわるお話。

【8月】

- 15、16日 増井幹事、西村幹事、山崎先生他1名にて生物調査実施。データがほぼ揃う。

【9月】

- 2、3日 定例プログラム「玉原高原ブナ平&藤原諏訪神社例大祭」を会員限定で実施。17名参加。(右写真は新調された幟の掲げられた諏訪神社)
- 10日 東京楽習会「火の文化と古代発火法」を荒川区・尾久八幡神社で実施。15名参加。(当初予定の内容で実施できず、改めて実施する予定)



(以上)

■2017 定例活動②「藤原の山菜を楽しむ」
—お福分け 恵み育ため 春遅し—

草野 洋

森林塾青水の春の活動は、自然の恵みを少しだけお福（すそ）分してもらおう山菜狩りである。1年8～9回の活動のうち、茅場の作業が中心でないのは5月のこの活動と今年は9月に開催の諏訪神社例大祭、そして3月の地域イベントをお手伝いするキャンドルナイトである。この3つは藤原の風景や文化に触れる遊びの色彩が強い。

今年は野焼きも雪に悩まされたが、藤原の春は2週間遅れている。ワラビも小さく、コシアブラやウワバミソウの生育も芳しくない。何とか間に合うのはコゴミ、イタドリ、ヨモギ、ギボウシであるが量が少ない。

そんなわけで、「新緑の下、藤原の山菜を楽しむ」と銘打って催した一般参加歓迎プログラムは、山菜はお預け、今回の宿、民宿「奈倉」のご主人の「山菜はあまり期待できない」との事前情報で新緑を楽しむプランに切り替えた。

藤原は今、紫の藤の花が盛りであり、これも「天ぷら」にと採取。食べたことはないが豆科であるのでニセアカシアと同じであろうと試すことにした（結果は試食の段階まで行かなかった）。



今年はフジの花が多く咲いている



トチノキも着花が多い

上ノ原に着くと、沢山の車が停まり、人が茅場で動いている。ワラビ取りの人々である。これではお福分けも残っていないだろうと、昼食後、奈倉のご主人の案内で照葉峽と水源の森林に行くことにする。ひょっとしたらコシアブラが・・・

しかし、ここも季節は遅く、まだ残雪が多く山に入れない。ブナの芽吹きを眺め、照葉峽の数か所のビューポイントでとうとうと流れる雪解け水を見ながら帰ることになった。

この時期の湯ノ小屋川は雪解け水が暴れるように流れる。これほどの水の量が見られるのは県道が開通してしばらくのこの時季しかないのです、ある意味

ラッキーである。山に蓄えられた雪が気温の緩みと前日の雨により一気に流れ下っている。その音で回りの新緑も圧倒されている。今の時期の主役は水である。



つづみの滝

思わず詠んだ一句

“新緑の
騒ぎかき消す 水の音”



途中、「須田貝」集落

の時間が止まったような静かな佇まいを見て宿に帰る。

宿のご主人が気を使ってたくさんの山菜料理を用意していただいた。それを堪能した後、車座講座。

今夜の車座講座は、藤原地区で俳句を詠むグループ「とちのみ」のメンバーの木曾武子さんと林美佐子さんにおいでいただき活動状況を語っていただく。会の句集を見ながら、会の発足のこと、俳句の作り方などを教えていただき最後にみんなで一句発句して披露することにした。ブログで予告した通り、その結果を全員の得票数順に、上位から五句紹介する。

- | | | | | |
|-------|---------|------|----|----|
| 草もちに | 味を残して | 急ぎゆく | 草野 | 12 |
| 競い合う | みどりにぎわう | 照葉狭 | 齊藤 | 10 |
| 青葉して | 武尊の嶺の | 雲はやし | 清水 | 8 |
| 雪融けが | 命のかけ橋 | 照葉狭 | 石垣 | 8 |
| イタドリの | 思い出語る | 川の道 | 岡田 | 7 |



お気に入りの1句に手を上げて投票

次の日、早起きして上ノ原に行くと、すでに20人ほどの人がいる。ワラビ採りかと近づくと、網袋を持ちウツギなどの新葉を摘んでいる。「何をしているのか」と聞くと、「木の葉を採取して、発酵させ酵素を作る」とのこと、東京の会社の社員が早朝から集まって作業しているようだ。今はやりの健康食品の類らしいがどんな葉がいいのかと聞くと「新葉なら何でも」とのこと、おいおい、此処にはドクウツギもあるし、ヤマウルシもある、それらの見分けがつくのか聞くとまるで知らない様子。無料の葉を集めて健康食品を作る？これで作った健康食品を売ると少し懐疑的になるが余計な心配かも。私はこんなものは買わない。

その後、県道の側溝掃除の箇所を下見しておき、7時に早起きができた人9人は朝飯前の1時間、奉仕活動をしてもらった。



この日、谷川の一ノ倉のブナ林と雪渓を見るプログラムに変更することも考えたが、上ノ原の散策も捨てがたくそのまま昼食まで薫風の上ノ原で散策と岡田さんの野点を楽しんだ。

今回はカナダから一時帰国して参加されたW.Yさんが天然の存在感を出してみんなの人気者に・・・。

「カナダからラブレター（感想）」をとの私のリクエストを本気に取ってくれたらどうか？

今回のプログラムは季節に見限られ、その場での変更を余儀なくされムたがこれも自然の中の活動、それはそれで楽しいものとなった。プログラムの変更が可能なのも藤原にはたくさんのタカラがあるからで、無理せずに安全第一でやればよい。

帰りに、宿の主人にももらったコゴミとワラビと菜の花のお土産が「山菜狩り」の面目を保った。

■2017 定例活動③「若返り伐採と木馬道再生」
—武尊山山開き神事にも参列—

草野 洋

今年の木馬道再生は6月の梅雨の時期にプログラムされたことから雨は覚悟の上であったが、空梅雨気味の天候に期待もあり、昨年に味



わった木馬の滑走の感激をもう一度と、梅雨空の中17名が参加。

まず、木馬で搬出した木材を木炭にするためにNPO法人奥利根水源ネットワークが新たに設置した改良ドラム缶炭窯の説明(8頁参照)を北

山塾頭にしてもらい木馬道再生の取り組みを意義づける。

木馬道は昨年50m作設している。それを延

長するので炭窯から昨年の終点ま

での路線選定を行う。炭窯のそばの一段高いところに土場(木材集積場)を決め、そこから昨年の終点地点まで急傾斜にならないようほどよい傾斜で、岩や根株を避けて選定する。途中接続の関係で急傾斜となるところは土盛り補整することとし、延長は約150m(総延長200m)となった。もちろん、散策路としても使える

路線に沿って刈り払いして斜面を切って(切土)路型を作り、路面を平らにして路盤ができる。途中の急傾斜のところが難所であり、栈木(土止め)を敷き盛土する。どうにか100mの路盤ができたの



締め方がわからない

でチェーンソーでミズナラを伐採して1.5m程度の盤木(路面に敷く横木)を作り、それを敷設する。昨年の経験があるので作業が捗り1日目で30



上 路盤づくり、チェーンソー伐倒
中 中間付近が接合部で難所
下 難所での作業



上 滑走開始 下 歓声は？

mに盤木が敷設できた。

作業終了前、始点近くにあった盤木を木馬で運ぶことにしたが、積載した材の縛り方、締め

方がわからない。今年は、阿部惣一郎師匠が怪我のため指導が受けられない。昨年かなりの技術を伝授されたつもりであるが、

機微なところはやはり師匠がいる

のといないとは大違いである。師匠がいればないと一とってしまう。木馬を滑走せせるが昨年と違いスムーズに行かない。なんとか70mほど滑走させたが昨年のような歓声が上がらない。

明日も天気がなんとか持ちこたえてくれることを期待して、重労働の1日目の作業を終わる。

この夜の宿は、温泉付きのロッジ「たかね」である。車座講座は北山塾頭に「自伐型林業への挑戦」としてお願いした。NPO法人奥利根水源ネットワークが上ノ原ミズナラ林の若返り伐採で出る木材を炭や薪にして販売する構想であり、みなかみ町がエコパークに登録されたことを契機に旅館やホテルが使っているマレーシアなどの炭に替わって地産地消の運動をおこし供給しようとするものである(8頁参照)。塾としても今回のようなプログラムを通じて協力することができる。参加者からも問題提起されるなど課題は多いがぜひ軌道いや木馬道に乗せてほしい。

2日目はかなり強い雨音で目が覚める。上ノ原に行ってみると昨日の木馬道で作業するとぬかるみになる恐れがあり、その場で作業の中止を決断する。

この日は武尊山の山開きの日である。塾も招待されている。山伏による神事があるとのことなので朝食後、裏見の滝そばの武尊神社に一同を案内した。

武尊神社に着くとすでに多くにの人がいて神事の準備ができていた。



奥利根源流藤原合唱隊に仲間入り

奉賀帳に記帳して記念品をいただき勧められて席に着く。利根川水源藤原合唱隊が山男の歌を歌うと、塾の山ガールたちははいてもたってもおられなかったのだろう合唱隊に飛び入り参加して一緒に歌って、とうとう最後まで合唱してしまった。地元と触れ合



法螺貝の音とともに修験道入場

てしまった。山ガールの諸姉とI.Mさんの快挙です。

来賓あいさつのあと神事が始まるとその厳かさと不思議な光景に感動を受けました。修験道山伏が吹く法螺貝で神事が始まり、般若心経、祝詞、まじない言上が奉じられて斧などを使ったまじないの作法が続いて玉串奉奠となり、塾もその栄を受けました。般若心経と祝詞の組み合わせも不思議だが、まじない言上はど

こかで聞いたような文句だと思っただけなら秋田マタギのことを書いた小説の中に出てくるおまじないと同じフレーズであった。



般若心教をとええる

「あびらうんけんそわか・アビラウンケンソワカ・阿毘羅雲吽欠薩婆詞！」が妙に耳に残った。その後、山伏を先頭に行列を組んで登山道を歩き、山開き神事は終了した。

ここで安全を祈願したことがこの後のアクシデントを武尊の神のご加護で最小限に食い止めることができたと思う。

この後、谷川岳天神平に行く予定でいたが、思った以上に時間を費やし、予定を変更し、裏見の滝を見る



山伏とぐんまちゃん

ことにした。

雪解け水と梅雨の水で滔々と落ちる滝水に圧倒された。此処は樹木の種類も多く解説しがいがある。



この後は上ノ原にも

どり、草原散策（ワラビ狩り）で過ごし昼食。

帰り道を運転中、疲れもあったのかほんの一瞬、目をつむったようでガードレールをこするアクシデント。皆さんの大切な命を任せられたドライバーとして失格である。同乗者の皆様にはひやりとさせたことお詫び申し上げます。直前に2回ほど妙なあくびをした時に休憩すべきだったと大いに反省しています。

木馬という言葉にひかれて参加する予定だった前橋市の日帰り初参加の2名の方は2日目が雨のためお目にかかることができなかつたのは残念。またの機会に是非おいでください。

■2017 定例活動④

「防火帯刈り払いと野鳥観察会」

草野 洋

梅雨が明けてまさしく猛暑、上ノ原でも30度を超える中での防火帯刈り払いである。

今回は前日入りして、次のプログラムの玉原越えを下見してからの藤原入り。もともと下り坂に弱い膝は1時間半の歩きでガタガタであるが、今回はこの後に本番の刈り払い機を使った草刈があるので体力がもつか、熱中症も心配である。



7月の上ノ原

参加者は、野鳥の会の上原さんグループが久しぶりに参加、初参加の女性が1名、合計16名。

参加者は、野鳥の会の上原さんグループが久しぶりに参加、初参加の女性が1名、合計16名。

上ノ原は、雪間焼なので防火帯は不要ではないかとの議論もある。しかし、2016年みたいに雪のない野焼がある。いずれは雪に頼らない野焼に備えないと除雪経費がいつまで続くかわからない。それと、春先のたばこ等の失火による類焼への備えもある。もうひとつ、刈り払いを続けることにより、草丈の

短い草原となり、モザイク状となる。田んぼの畔刈りもそうであるが、このように適した植物がよく育ち、生物多様性が豊かになる。「草刈がつなぐ命」の生育場所になるということ。



初めてのエンジン付き刈払機も手慣れたもの

暑いこの時期に刈るのはススキなどの光合成能力が旺盛になる前に刈り取ることで、養分を地下茎に蓄積させず衰退させる効果があり、刈った草も腐るので持ち出し不要である。

参加者を2チームに分け、1チームは上原さんが先導して野鳥観察である。

まずは双眼鏡や望遠鏡の基本的な扱い方を教えてもらうことから始まり、ススキ草原のほかミズナラ林、カラマツ林を回った。夏は野鳥の繁殖も一段落して、鳥の声も聞かなくなっている。それでも、みんなでホオジロやウグイス、コガラ

（ヒガラかも）、イカルのさえずりや警戒声を聞き、ホオジロ（雄）とモズ（雌）の姿を確認しあつたのは収穫だった。上原さんは鳥以外の動植物にも関心が高く、参加者も一緒になってヒメシジミやアサギマダラ、ミドリヒョウモンといった蝶たちの飛翔、そして



ホオジロ

（ヒガラかも）、イカルのさえずりや警戒声を聞き、ホオジロ（雄）とモズ（雌）の姿を確認しあつたのは収穫だった。上原さんは鳥以外の動植物にも関心が高く、参加者も一緒になってヒメシジミやアサギマダラ、ミドリヒョウモンといった蝶たちの飛翔、そして

カラマツに絡んだイワガラミとツルアジサイの花などを楽しむこともできた。



モズ

もう、1チームは、安全教育の後、6台の刈払機を駆使してカラマツ林の隣接防火帯から刈り払う。もう何年も刈りはらっているので草丈は短く、刈り易い。暑いので、水分補給は欠かせない。エンジンがストを起こしたすきに座り込み休養である。それでも予定の半分を終わることができた。

もう、1チームは、安全教育の後、6台の刈払機を駆使してカラマツ林の隣接防火帯から刈り払う。もう何年も刈りはらっているので草丈は短く、刈り易い。暑いので、水分補給は欠かせない。エンジンがストを起こしたすきに座り込み休養である。それでも予定の半分を終わることができた。

今宵の宿は並木山荘、夕食後上原さんの車座講座「藤原付近の野鳥と観察のポイント」が始まる。

上原さんは、野鳥の会の歴史から始め、野鳥という造語ができたこと、野鳥の会はバードウォッチャーを増やすことが主目的でなく、野鳥を愛でる心を通して自然を守り育てる人を増やすことだと力説された。

そのあと藤原付近で観察された32種の野鳥を上げながらその特徴や鳴き声を解説されました。取り上げられた野鳥の主なものは、カケス、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラなどのカラ類、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、エナガ、ミソサザイ、ツグミ、キビタキ、オオルリ、クマタカなど。そのあとガビチョウなど外来種と日本固有種との関係、鳥は羽をもちグローバルに動く生物であり生態系に大きな影響を与えるので野鳥を知ることが生態系や自然の状況を知る手掛かりになると解説された。

2日目早朝の探鳥会では、まず宿のすぐ近くで電線の上や地面に集まったカラヒワの群れをじっくりと観察できた。ただ、すぐに雨模様の天気となって傘をさしての散策に。鳥たちも動きを止めて休んでいるようで、川でキセキレイの姿を捉えることはできたものの、途中で早めに切り上げることになった。

今日一日、雨で作業ができるかどうか危ぶまれたが、防火帯刈り払いには雨の中でもできるし完遂しなければならない。ほかのメンバーには茅刈がやりやすいようにするため、ススキの中の雑草を取る作業をお願いした。これは新メニューであり雨降り時の作業として採用できそうである。

幸いに雨は本降りにならず着込んだレインコートも不要な天候と



ユーモアたっぷりに鳥の魅力語る



なった。

2人の女性メンバーがこの機会に体験したいと申し出たのでゴルフ場側の防火帯で初挑戦である。実演で安全教育を念入りに行い、刃物の付いた機械であることを認識してもらい刈り払いに入る。初めは腕だけで、刃を振り回すような状況にひやひやしながら見ることに。20分ほど刈り、休憩時に自分の刈った跡を見せて、どうすれば要領よく刈れるかを納得してもらおう。

その後の刈り払いは、腰つきも良く、安定してきたので比較的長く刈らせて自信をも持ってもらおう。

全体で1時間10分ほどの実体験を終わる。初めは誰でもうまくいかないが、あとは慣れである。きっと明朝は腕が筋肉痛だろう。その痛みを超えたお二人は来年戦力として期待できそうである。

今回は、ベテランのK.Hさん、S.Oさんのプロの腕も発揮され予定通り全面積を刈り終えた。皆さん暑い中有難うございました。

上ノ原賑わい観察(野鳥)・防火帯刈り払い 城之内みちこ

4月末の「野焼き・山の口開け」に初参加の友(若子さん)から、私を上ノ原へ誘うメールがはいりました「360度パノラマ、まわりはぐるっと山に囲まれ素晴らしい景色です。あなたはこういう景色が好きなんだろうと思いました。黒モジという香りのよい枝にパン生地を巻きつけて炭火で焼いて食べました。明日は野焼きです・・・」

このメールに誘われ、森林塾青水の活動について何もわからないまま、谷川岳・尾瀬の玄関口である上毛高原駅から、みなかみ町藤原の素晴らしい景色に会えるのを楽しみに参加しました。

○7月22日(土)

上ノ原に着き、標高1000mの高原で涼しさを期待していましたが、梅雨明けの猛暑に変わりなく木陰でお昼をとり、野鳥観察班に参加しました。

野鳥観察

上原さんに双眼鏡の使い方の説明を受けました。(扱いが分からず困っていたので、丁寧に教えていただけて助かりました)。

ススキの原からミズナラ林では、鳥の声に耳を傾け・・・というより、野草のショウマ、ヒヨドリバナ、ウツボグサ、オカトラノオ、アザミ、ネジバナ、オダマキ等に夢中に・・・。ヒメシジミ他の蝶は望遠鏡でしっかり観察させていただき、ウグイス(姿を見せない)、ホオジロ(ソングポイントに止まっているのを20倍望遠鏡で、ほおの白い毛、毛づくろいの様子を観察)、ヒヨドリなどの声も聞くことができました。山の中で歩いているとけたたましい鳥の鳴き声がしますが、これは人が通ると警戒して鳴き始めるということでした(上原さん)。野鳥の本、山野草の本で調べて見せてもらって確認もできました。

カラマツ林(上州武尊の登山口あり)では、ウグ

イス、アサギマダラ（とてもきれい）、ヒメシジミなどがいて、山アジサイ、蔓アジサイがたくさん咲いていました。

途中で刈払い班の草刈機の音が聞こえ、作業服のオレンジ色のつなぎが原っぱによく映えていました。

車座講座

野鳥の会といえば「長ぐつ」ということで、まずこの話から始まりました。そして本題の群馬県、特に藤原地区近辺に 30 種以上の野鳥が確認されていること、種類は鳴き声から確認できることなど興味深く聞きました。また、渡り鳥も地球温暖化の影響を受けていることや、外来種のガビチョウが繁殖しすぎとの話もありました。野鳥を観察し講座も受けて、鳥やその鳴き声が気になるようになりました。

○7月23日（日）

野鳥観察

宿近くで電線に止まっているカワラヒワの群れをしっかりと観察しました。まもなく雨が降り出したので傘をさして散策をしました。

ススキの間の草取り

ススキの刈り取りに混じるハギは特に枯れるとススキの枝のようになり区別が厄介になるので、この梅雨明けの7月～8月に刈り取ってそのまま放置すれば、地面のカバーにもなり草も生えにくくなるので好都合であるとのこと。オカトラノオ、アザミ、ヨモギなども鎌を使って刈り取りました。「飲水思源」の冷たい水が美味しかったです。

最後になりましたが、この二日間、塾長さん、皆さま方とご一緒させていただき、久々にきれいな空気を吸えたこと、野鳥、野草にふれあい興味がもてるようになったこと、草刈等の楽しい体験をさせていただいたこと、有難く感謝申し上げます。

■2017 定例活動⑤

「玉原のブナ平と藤原の獅子舞」

米山 正寛

9月2日（土）～3日（日）の定例活動「玉原高原ブナ平&藤原諏訪神社例大祭」は森林文化協会との協力企画として、青水の活動拠点である群馬県みなかみ町藤原と、そこに隣接する同県沼田市の玉原高原とで実施しました。会員限定の企画としましたが、計17人の参加を得ました。

初日は、集合場所のJR上毛高原駅から果樹園の集まる沼田市郊外を通過して玉原湖のダムサイトを見学した後に玉原高原へ。センターハウス前の駐車場

（標高約1170m）で昼食を済ませてから、ブナ平（標高約1300m）との間を往復し、関東隋一と言われるブナ林を堪能しました。ブナ林は奥利根水源の森などでも見ましたが、高木層にはブナのほかにミズナラやカエデ類が混生していることがほとんどです。一方、こちらのブナ平はブナの優占度が高いのが特徴的でした。戦前から戦中にかけて国の事業として

ブナが大量に伐採されましたが、その後の約70年余りは残ったブナが伐採されることなく生育したのが現在のブナ平です。曲がったブナは3mを超す積雪に耐えて生きてきた証でしょうし、樹齢300年を超えるようなブナは



かつて「悪い木」と判断されて伐採を免れたものなのでしょう。大きなブナには、ツキノワグマの爪痕やニホンミツバチの営巣跡が見られ、ブナと動物たちとの深い関わりを感じることができました。

ただ、ブナ平の林床はほぼ一面がチシマザサ（ネマガリダケ）に覆われ、ブナの世代交代は必ずしもうまくいっていないようです。そのためNPO法人「玉原高原の自然を守り育てる会」が利根沼田森林管理署から入林許可を得て、調査や植樹に取り組んでおられます。この日は同会の活動日に当たっていたため、ブナの木

の下にシードトラップを設置しての結実量調査の様子や、植樹後の成育状況などを見学させていただく機会を得ました。



シードトラップ用の網を設置している

宿泊したのは、東京大学玉原国際セミナーハウスです。環境保全のために一般車の通行が認められていないエリアにあるため、センターハウスから20分程歩いて到着しました。群馬県産の樹齢約80年のカラマツをふんだんに利用して1988年に完成した大型木造建築です。

2日目は朝8時から、かつて藤原の人々が沼田市街地への往

来に使ったと言われる

「玉原越え」のルートをと、藤原湖畔まで下りました。冷涼な地域の北向き斜面で、途中



玉原越え出発前（セミナーハウス前）

からは沢沿いをたどる道です。かつて植林されたスギの状態はあまり芳しくない様子でしたが、オヒョウやキハダ、サワグルミ、カツラ



玉原越えの森にはさまざまな木々



荒れた道は浮き石に注意

など普段の藤原での活動では目にすることの少ない木々を観察しながら歩きました。昔の人たちは、この道を使って馬に背負わせた炭俵を運んだそうですし、嫁入りや奉公のために娘さんや子どもたちが歩いたのかもしれません。そんな過去の生活に思いを馳せながらの2時間余りでしたが、標高差約

600mを下りるためにより急傾斜の場所もあって、緊張感も伴ったトレッキングとなりました。

そして到着した湖畔の県道（長沢橋バス停付近）で迎えの車を移動させてくれ



今年の当番は上区、移住者の初舞台も実現

たドライバー陣と合流し、10時半過ぎには例大祭の開かれている諏訪神社に到着しました。伝統の獅子舞のほか、ダンスや歌といったパフォーマンスが次々に披露され、気に入った演目には観客席からたくさんのおひねりが飛んでいました。

日頃からお世話になっている藤原の人たちとの交流をしばし楽しんだ後に神社を離れ、帰路の途中で「そば処 一水」の細めながらこしのある蕎麦に舌鼓を打ってから、上毛高原駅へと戻りました。

■藤原現地事務所報告

「困難な時代を生き抜く暮らしの知恵」 北山 郁人

みなかみ町には、ラフティングをはじめとする、多くのアウトドアスポーツの会社やキャンプ場などがたくさんあり、夏には多くの観光客で賑わいます。そして、多くの方が、バーベキューなどをして楽しめます。しかし、残念なことに、その時使用される炭は、マレーシア産のマンガローブの炭なのです。価格も安く、ホームセンターな

どではキロ100円程度で売られています。年間どのぐらい、この炭が消費されているか正確にはわかりませんが、数十トン単位で消費されていることは間違いありません。あるホームセンターでは、全国で一番たくさん炭を売ったということで、本部から表彰されたということでした。ここ数年、藤原でも伝統的な白炭を少しずつ焼き始めていますが、山から木を切ってきて、1mほどに切り揃え、大きさがそろるように割り、灼熱に耐えながら炭を焼いても一日で生産できる量は、100キロもありません。マンガローブの炭は、煙も出るし変な臭いもするので、藤原の白炭とは、比べ物になりませんが、どう考えてもキロ100円で生産することは不可能です。

みなかみ町は、今年の6月14日にユネスコエコパークに登録されました。その目的は、みなかみの豊かな自然を守りながら活用し、自然と人間社会の共生を目指す取組とのことです。それなのに、日本で一番マンガローブの炭が売れているとは、なんとナンセンスな話でしょう。マンガローブの炭の箱には「マレーシア政府の管理により、森林を破壊しないように生産されている」とありますが、遠い外国の森を切り作られた炭を沢山の燃料を使って日本の山奥まで輸送し、それでバーベキューをするなんて、なんと愚かなことでしょう。

そこで何とか、みなかみの木で焼いた炭を地域で使ってもらえないか、挑戦しているところです。改めて炭焼きのことをいろいろ調べてみると新しい技術やアイデアで新しい炭焼きを実践している方たちがいることもわかりました。伝統的な手法以外にも挑戦していきたいと思っています。そして、みなかみの木で焼かれた炭を使うことにより、地域の自然が守られ、豊かになることを付加価値としてアピールし、ユネスコエコパークの名に恥じない、本物のエコパークを目指していきたいと思っています。



写真説明 宮城県の阿部さんが開発したドラム缶の窯。(特許取得済)材料は竹。この窯を使うと比較的短時間で焼くことができるので、体験プログラムとして有効に活用できる。これを大型化して生産することも可能で、希望が見えてきた。



■藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑬
中村 智子

今号は中村さんに、藤原に生息しているカモシカの一年の様子を特集していただきました。一年の間に、こんなに装いを変えて自然に適応し、暮らしているのですね。(編集子)



4月ごろ、冬毛から夏毛に変わっていきます。



春(5月)、毛が抜け換えて、すっきりしました。



真夏(8月)、鹿のようにスリムです。夏は木が生い茂った森の中にいるので、なかなか見ることが出来ません。貴重な1枚です。



秋、この年に生まれた子と母カモシカ。



晩秋、そろそろ、雪になるころ。



冬、雪の中で、笹を食べていた。



早春(3月)、親子カモシカ。冬毛です。

■協賛団体紹介(第5回)

「水上高原リゾート200」

稲 貴夫

森林塾青水の協賛会員として様々な形で活動にご協力いただいている企業や団体を紹介します。第5回目は、水上高原リゾート株式会社です。

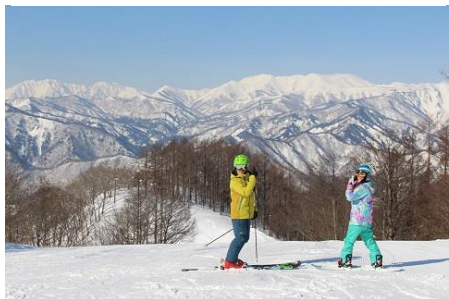


「水上高原リゾート200(トゥーハンドレッド)」は、森林塾青水の活動拠点「上ノ原」の北々西側に隣接して立地している敷地面積200万坪の総合リゾート施設です。上ノ原はかつて、200ヘクタールを超える入会の茅場でした。しかし昭和40年代に入ると屋根材としての茅の需要は無くなり、上ノ原の茅場としての入会利用・共同管理の伝統は途絶えました。そして40年ほど前に、利用されなくなった茅場の大半を当時の国土計画が買い取り、今の「水上高原リゾート200」の前身となる施設が整備されていったのです。その際に残され、水上町(当時)の町有地となっていた21ヘクタールの里山と草原を、現在青水が管理、利用しているのです。ですから水上高原リゾートと青水は、隣同士であるばかりでなく、同じ親から生まれた兄弟と言えるかも知れません(規模はだいぶ異なりますが)。

「水上高原リゾート200」は、水上高原ホテル



秋の「水上高原ゴルフコース」



「水上高原スキーリゾート」山頂

200を中心に、ゴルフコース、スキーリゾートをはじめ、豊かな自然を生かした様々な施設の新規整備と経営を目的として平成19年に設立され、翌年より営業を始めました。そして、新たに子供向けのアクティビティを考案するなど、家族で楽しめるリゾートを目指しています。

訪れる人々に、心と時間と人を通して豊かな空間を提供するために、3つの「ビジョン&ポリシー」を掲げています。

1. 溪谷美に彩られた水上で見つけたスローライフの醍醐味「心：料理・リラクゼーションスペース」
2. 自然に囲まれゆっくりと流れる時間「時：温泉・ゴルフ・スキー」
3. 笑顔で過ごすことで私の中に元気をくれる「人：接客・アクティビティ」

特に、豊かな自然や地域の伝統を生かした様々な体験コースが用意されていますが、その一部を紹介しましょう。

- 親子で楽しむ「手作り体験」～郷土食を味わおう！「ぼた作り」～(夏季)
- 満天星空！星い～っぱい♪観賞会(春季～秋季)
- ホテルの里・ホテル観賞ツアー(明川・7月下旬)等々

この他、山頂から絶景を楽しめる須原トレッキングコース(春季～秋季)や白樺林の散策路、そして冒



険好きな人には、森の中を探検しながら楽しめる総延長1.2キロメートルの「水上高原フォレストジップライン」(左写真・春季～秋季)もあります。家族連れや若者グループが美味しい食事と豊かな自然、そして水上温泉郷の中でも特に美肌の湯として名高い「上ノ原温泉」を満喫することができます。

冬は犬ぞりも楽しめます！

かつての広大な上ノ原の草原。その面影は、ゴルフコースの底部に残された水芭蕉の生育地などに、今も見るすることができます。みなかみ町のユネスコ・エコパーク登録を契機に、さらに大勢の人々に訪ねていただけるよう、今後も取り組んでゆきたいとのこと。6年前には、上ノ原での星空ウォッチングを協働実施したことがありますが、上ノ原のゆたかな自然と生物多様性の更なる保全と活用を共に考え展開してゆくことができれば素晴らしいですね！

水上高原リゾート株式会社

所在地 〒379-1721 群馬県利根郡みなかみ町
藤原 6152-1

TEL:0278-72-2222/Fax:0278-75-2312

URL: <https://www.minakamikogen200.jp/>

■野守のつばやき(11)

～草木供養塔との再会と惣一郎さんとお別れ～

●草木塔と天音の滝 上ノ原の5月のプログラムは定番



「山菜教室」。小生は26日から前泊、散策を楽しんだ。まずは、十郎太の沢水で喉を潤す。沢沿いに登って、冬の間横倒しにしていた草木塔を立て直し頭巾を巻いて差し上げる。今年一年の作業の安全と草木の成長を祈願。次に、管理道沿いのニセアカシアのチェック。今年はずか一株のみ。これまでの根競べに勝ったか？ 皆さんにもご覧いただき、6月までの生育状況観察のため抜去せずに残す。

最後は、お目当「天音の滝」へ。「柞の泉」から木馬道を登って十郎太沢の水源を目指す。雪解けの水を集めて飛沫を上げて流れ落ちていた。しかも、二流れ！今年の積雪は充分だったので、7月頃まで楽しめるか。

最後は、お目当「天音の滝」へ。「柞の泉」から木馬道を登って十郎太沢の水源を目指す。雪解けの水を集めて飛沫を上げて流れ落ちていた。しかも、二流れ！今年の積雪は充分だったので、7月頃まで楽しめるか。

●ラムサール登録湿地のヤナギ退治 6月11日。「渡良瀬遊水池の自然を守る利根川流域住民会議」主催の植物観察会とヤナギ退治作業に参加。ヨシ原に侵入・跋扈するヤナギやセイタカアワダチソウにイノシシ、など。今回は「みんなできる事を」ということで、絶滅危惧種・ジョウロウスゲの保全を兼ねたヤナギ稚樹の抜去作業に汗を流した。あいにく小雨模様だったが、地元の高校生や親子連れ、市役所のスタッフ、植物や昆虫の研究者など多様な参加者が協働。途中、タチスミレを発見、保全シンボルに追加するなど、楽しく実りある一日だった。



「みんなできる事を」ということで、絶滅危惧種・ジョウロウスゲの保全を兼ねたヤナギ稚樹の抜去作業に汗を流した。あいにく小雨模様だったが、地元の高校生や親子連れ、市役所のスタッフ、植物や昆虫の研究者など多様な参加者が協働。途中、タチスミレを発見、保全シンボルに追加するなど、楽しく実りある一日だった。

●木馬道の延長・試運転とニセアカシア退治



6月24日。みんなで寄ってたかってトンテンカン打ったり掘ったり。気が付けば総延長130m余に。どうやら、この仲間には老若男女を問わず森の民のDNAが流れているらしい！



5月には抜去せず、試験的に放置しておいたニセアカシア1株。何と、ひこばえを含め3株に。1か月で3倍増殖。凄い生命力だ。直ちに根こそぎ抜去。さて、この根競べいつまで続く？

●武尊山山開き神事

6月25日。修験道の僧たちが法螺貝吹いて祝詞を上げる神仏混淆の厳かな儀式。途中から、利根川源流讃歌の有志会員による合唱や縫いぐるみのキャラクター・ぐんまちゃんの登場もあって和気藹々に。山伏は神の山の「守り人」でもあった。



●ブータンは“国・丸ごとエコミュージアム”だった



7月14日～22日。かねて念願のブータンを訪ねた。「国民総幸福」を標榜する国の実相に関心あつての旅だった。小生なりの結論は「スロー、シンプル、知足をもって幸福度を高める賢い国」「自然と歴史と文化の保全・活用を図る“国・丸ごとエコミュージアム”」。正に環境先進国だった。「もともと、あれもこれも」で不幸なGNP先進国はGNH&環境先進国ブータンに学ぶべし！

幸福度を高める賢い国「自然と歴史と文化の保全・活用を図る“国・丸ごとエコミュージアム”」。正に環境先進国だった。「もともと、あれもこれも」で不幸なGNP先進国はGNH&環境先進国ブータンに学ぶべし！

●重要無形文化財・惣一郎さん大往生 8月22日。

阿部惣一郎さんの告別式。享年85歳。茅刈り、野焼き、カンジキやボタに炭窯造り。その他、すべて惣一郎さんに手取り足取り教えてもらった。我々は、語り部を超えた重要無形文化財としてのかけがえなき存在を失ったのだ。しかも、お世話になってきた感謝の気持ちをきちんとお伝えする機会もなく突然のお別れ。

正に、痛恨の極み。この上は、我々が惣一郎さんから学んだことをしっかりと継承・実践していく他にご恩返し之道はない。合掌。



平成29年長月(青)

～編集後記～

『茅風通信』第52号をお届けします。今年の夏、首都圏では梅雨が明けた7月は猛暑となりましたが、8月は暑さは和らぎ雨模様が続くなど、一言では言えない天気でした。これは異常気象なのか、全部均せば平均値だから平年並みなのか、統計データで比較しようにも、基準の置きかたで結果が異なるため、単純には言えないようです。ともかく、今年も多くの方が訪れた上ノ原の夏が無事に過ぎ、彩り豊かな秋を迎えようとするこの時季に、『茅風通信』第52号が刊行できましたことを心から感謝申し上げます。(稲)